

ルーロットの出会い

大森 康宏（おもりやすひろ）
民族文化研究部



ペリー地方のサンゴッティエ



マドマゼル ボラトン

今年二〇〇五年三月三日、フランスのペリー地方に流れるクルーズ川沿いの小さな町サンゴッティエにある菓屋の女主人、ボラトン婦人が他界した。このマドマゼルこそ、移動民ジブシーのひとつの部族マヌーシユを生涯に渡って支援してきた人物であった。また彼女は民博のヨーロッパ展示場の農機具やブドウの蒸留釜、家庭用品や衣装などの収集にも尽力をしてくれた。享年九〇歳であった。



移動民マヌーシユを支援した
マドマゼル ボラトン

彼女はマヌーシユの家族手当や保険手続き、養育費の申請そして家族全体の移動証明書などの手続きをはじめ、国に対してマヌーシユの移動規制緩和の要請などの支援をしていた。なかでも家馬車ルーロットの生活者に対しては、その厳しい生活条件を棄てず、そのための援助と支援を惜しまなかった。事故や事件に巻き込まれたマヌーシユの法的措置に対して的確に対処するのもボラトン婦人であった。

彼女に初めて会ったのは一九七八年の初夏であった。パリからオルレアンの移動民マヌーシユの家族手当や保険手続き、養育費の申請そして家族全体の移動証明書などの手続きをはじめ、国に対してマヌーシユの移動規制緩和の要請などの支援をしていた。なかでも家馬車ルーロットの生活者に対しては、その厳しい生活条件を棄てず、そのための援助と支援を惜しまなかった。事故や事件に巻き込まれたマヌーシユの法的措置に対して的確に対処するのもボラトン婦人であった。

馬糞を手がかりに追跡

一九世紀の終わりに、イギリスでワゴンタイプの馬車が使われ始めた。それが海を渡ってフランスのブリュターニ地方に伝わった家式の馬車ルーロットである。ルーロットで生活するマヌーシユの生活者にはペリー地方よりもワール河沿いに多いと、デジール家を教えてくれた。

洋からの来訪者を見つめていた。親音開きの扉の陰には、左右に小作りの戸棚があり、その左奥にタルマ式のストーブが置かれている。一番奥には高さ七〇センチメートルほどのセミダブルベッドが横にしつらえてあり、富の象徴である豪華な花模様羽根布団がうすたかく積まれている。ベッドの下は、若い娘たちが寝るところである。装飾に使われる布地は、色彩豊かで遠い祖先の出生地であるインドの雰囲気をかもしだしている。床下には、車軸との間に柳の枝束がおかれ、籠作りの素材となる。ひとしきり話を聞いて、レイナー家の家系であるルーロットと別れた。

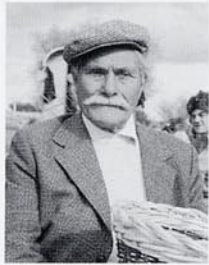
このうち彼らが信仰する福音派の大会にて、デジール一家の大ルーロット集団に出会った。その長老デジールは、風貌と人格ともにマヌーシユの人生を映像で語るにふさわしい人物であった。



扉に刻まれたシンボル、馬の頭部の像



街中をいく家馬車ルーロット



マヌーシユの長老、ティディ翁



日本に搬送されるルーロット

シユに初めて出会ったのは、夏も過ぎて秋に入ってからであった。接触までには多くの時間がかかった。

早朝からマヌーシユが停留していたと思われる焚き火の燃えかすが残された場所をかき取りに追跡を始めたが、白い霧に阻まれ、路上に残された馬糞が手がかりの徐行運転では時間が過ぎるばかりであった。彼らの移動態勢もリズムも心得ずに調査に出た自分に憤慨した。

考えてみれば時速二〇キロメートルほど進むルーロットは、エンジン付きの車が移動する道から脇に入りこみ、地図にも記載されていない私道を進んでいた。しかも車で走る地図上の道程よりも、はるかに短い道を行く彼らは予想以上に前進しており簡単には見出せなかった。

パリから三〇キロメートルほど南西にある、ワール河沿いの街、モントリシャール近郊の濃い霧に包まれた小道で、前進してくる数台のルーロットに遭遇した。

初めて会うルーロットの持ち主であるマヌーシユの男は、立派な口ひげと白いシャツの上にチヨッキを着て、馬の手綱を引いていた。馬のうしろに一平方メートルほどの床面積のあるルーロットのなかから妻と四人の子どもたちが予想せぬ東

ティディについての民族誌映画は、「私の人生：ジブシー マヌーシユ」として一九七七年に完成した。

のちの調査の結果、ルーロットの生活時間に関する割合が明確に決められていることが判明した。ルーロットは一日のうち睡眠時間以外は、洋服の着替え、雨宿り、ちようとした休憩に使用されるだけである。冬でも食事は外で個人単位になされている。

そして民博へ

ルーロットは本来、もち主が死亡すると焼却するものだが、ボラトン婦人はこうしたルーロットを三百台、知人の保管倉庫にもついていたのである。そのうちの一台を民博が購入した。ペリー地方を移動しているマヌーシユのロパン家のものであった。扉の両側に彫刻された馬の頭は、彼らの移動手段である馬への敬意を象徴している。

ボラトン婦人も「私の人生：ジブシー マヌーシユ」のなかに登場している。彼女のジブシーとの交流についてのさわやかな語り口の部分は、定住型のフランス人にとって印象深いものであった。一九七七年の民博開館以来ルーロットはヨーロッパ展示場では異色な大型展示物であった。しかし二世紀に入つて新しい展示構想が実施されて、この大型展示物は引退して倉庫に収められた。

同じようにマヌーシユの人生を記録した映画は、ボラトン婦人が他界して二日目の三月二五日に、日本の国立近代美術館のフィルムライブラリーにて上映されたのち、その微笑とともに、国の保管取蔵庫に収められることとなった。